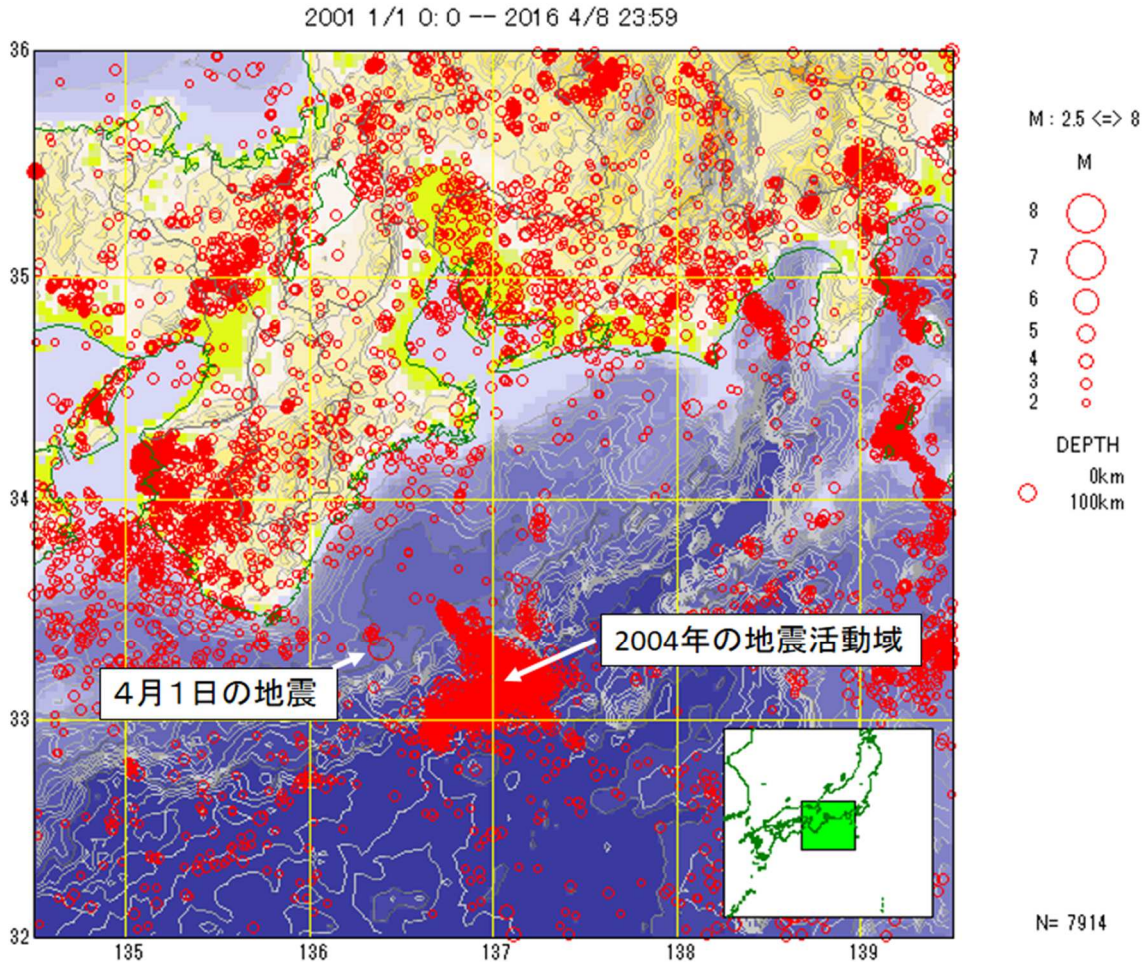




東海・東南海地震発生域の現状

4月1日に紀伊半島沖で70年ぶりとも言えるマグニチュード6.5の地震が発生した事を前回のニュースレターでお知らせしました。今回はこの地域についての地下天気図をお見せします。

紀伊半島沖では、2004年9月にマグニチュード7.4と7.1の地震が発生しています。この地震は、東海・東南海地震が予想されるのとは、異なった場所（プレート境界ではなく、プレート内部での破壊、東海地震や東南海地震はプレート境界で発生すると考えられている）で発生した事から、規模はかなり大きかったものの、東海地震にはつながらないと当時も判断されました。

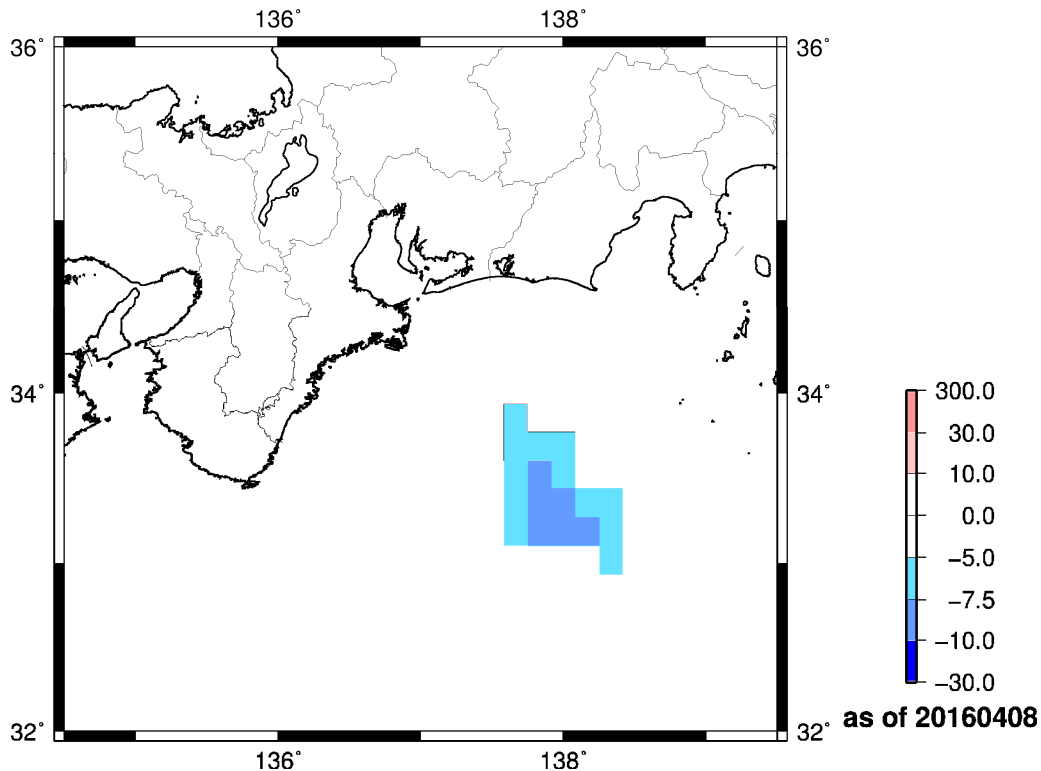


したがって4月1日の地震は、東海地震や東南海地震が発生すると考えられているプレート境界で発生した70年ぶりの地震という位置づけになるのです。ちなみに2004年の地震は上の図で紀伊半島沖に赤く固まって表示されている場所で発生しました。

遠州灘（御前崎沖合）や熊野灘（紀伊半島沖合）はもともと普段の地震活動が低調であるのが特徴で、この点が東北沖と大きく異なる点です。つまり東海沖や熊野灘では巨大地震が100年とか150年に一度発生してきた事が歴史的にもよく知られていますが、普段は断層がべったり固着しており、いわば100年に1回大きく動くという特徴があります。今後解説していきますが、この「普段は“べったり”くっついている」という事が東海地震では前兆現象が発現しやすいと考えられる大きな理由なのです。



次の図は4月8日時点の地下天気図です。2004年の地震活動の東側で現在静穏化が進行している事がわかりました。さらに4月1日の地震はその後の地震活動の解析により前震の可能性はほぼゼロである事もわかりました。



下の図は静穏化の中心付近（北緯 33.3 度、東経 138 度の地点の静穏化（RTM パラメータの時間変化です。現在まだ静穏化が進行中で、元のレベルに戻っていませんので、遠州灘ですぐに大きな地震が発生する状況では無いと考えています。さらに静穏化の大きさ（面積）が小さいですから、発生したとしても **M7程度**と推察しており、かなり揺れますが、被害は生じない（津波警報にはならない）と考えています。

